

平成 21 年 6 月 22 日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19791766  
 研究課題名 (和文) 世代間交流に焦点を当てた高齢者の生活の質とライフスタイルとの関連  
 研究課題名 (英文) The relationship between the quality of life and lifestyles focused on an interchange between the generations  
 研究代表者  
 萩原 潤 (HAGIHARA JUN)  
 宮城大学・看護学部・准教授  
 研究者番号：90347203

## 研究成果の概要：

これまで行われてきた生活の質に関する研究は対象者が居住する地域の情報といったローカルな視点がなく、また、健康に関わる項目がその大半を占め、「生きがい」という言葉に代表される生活そのものへの評価が軽視される傾向にあった。本研究は対象地域において生活する上で「生きがい」に関わる項目をインタビューによって調査下上で、生活の質質問票を作成し、その評価を行ったものである。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,600,000		1,600,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,700,000	330,000	3,030,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：公衆衛生看護学, 高齢者

## 1. 研究開始当初の背景

平均寿命が延びたことにより、高齢者としての時間は増加している。また、都市化により、地方に居住する高齢者の独居世帯や夫婦単独世帯が増加している。このような現状において、「生きがい」という言葉に代表される現在の生活の満足度が死亡率に影響を与えるという報告があるなど、個人の生活の質 (Quality of Life: QOL) は現在我が国での保健政策の上でも重要な概念である。

また、過疎化による影響は「限界集落」という言葉で代表されるように、コミュニティ

としての機能を維持できない状況を引き起こす。そのような状況において、集落の機能を維持するためには、高齢者自身が能動的に集落維持活動に取り組むことに加え、来訪者による維持活動が考えられる。そこに発生する来訪者との円滑な交流によって、集落機能の維持が可能となる。都市部からの来訪者にとっては豊かな農村体験が期待できる。

来訪者との交流を前提とした集落機能維持システムを構築するためには、来訪者にとって交流先となる地域が魅力的に映らなければならない。そのためにはまず農村の居住者が現在のライフスタイルやその場所での

生活そのものをどのように評価しているのかを知る必要がある。

## 2. 研究の目的

社会的な交流を前提にした健康な地域生態系の構築を目指す上で、社会的交流、特に世代間交流に焦点を当て、実態を明らかにすることである。

具体的には、聞き取り調査によって、居住者、特に高齢者がどのようなことに生きがいを感じているのか、どのような生活を行い、それが居住者にとってどのような重要性を持っているかについての情報を得る。

それら調査を元に、居住者の価値観や満足度をもたらす要因について考察し、「その地域で住む」ことがもたらす生活の質、満足度指標を作成し、居住者に配布し、全体の満足度の評価を行う。

## 3. 研究の方法

対象地は山梨県南巨摩郡早川町とした。早川町は山梨県の中でも最大の面積であるが、平地面積割合が3.4%と低く、人口減少率、65歳以上人口割合、老年化指数、65歳以上単身者割合といった人口に関する諸指標から、顕著な人口減少、少子高齢化が進んでいることがわかる。

聞き取り調査は、町内の一集落の住民を対象に行われた。調査項目は、家族に関する項目と、生活実態に関する項目に分けられる。家族に関する項目は、対象者の婚姻関係や子供の出生年齢に加えて、その子供の居住地とコミュニケーション頻度である。婚姻状態、子供の出生年齢から家系図を作成し、分析を行った。生活実態に関する項目は、一日の時間の使い方について調査を行った。調査は2007年10月に行った。

それらの結果を踏まえ、満足度指標を含めた質問紙調査は2008年度に行った。この際には町を細分化した行政区の区長に区内居住者への質問紙配布を依頼し、町内居住者すべてを対象とした。

## 4. 研究成果

先のインタビュー調査では、男性9人、女性13人の22人を対象者とした。対象者の平均年齢は、女性が72.6歳、男性が74.7歳であった。

一生のうちに子供を産む完結出生数の平均は3.44人であった。80代未満のグループと80代以上に分け、完結出生児数を比較したところ前者では平均2.64人であったのに対し、後者は4.71人であった。

第一子出生時の平均年齢は22.4歳であった。対象者の年齢と第一子出生時年齢との間に相関関係はみられなかった。末子の出生年齢の平均値は30.1歳であった。80歳で2つ

のグループに分け比較すると、80歳未満の平均値は28.7歳であったのに対し、80歳以上では平均年齢は33.5歳であった。

第一子の出生年齢の平均は22.4歳であった。出生間隔は第一子～第二子の平均が2.7年、第二子～第三子間が4.7年、第三子～第四子間が2.3年であった。これを出生人数2人以下と、3人以上のグループに分けた結果、完結出生児数2人以下のグループでは平均の出生間隔は3.0年であるのに対し、3人以上のグループでは2.6年、第二子～第三子間が4.4年、第三～第四子間が4.7年であった。

出生数は対象者が高齢になるほど多く、当時の対象者の出生行動は全国的な調査と同じ傾向であった。また、第一子出生の年齢は対象者の年齢と関連がなく、多くの子供を出生している対象者は末子の出生年齢が高いという結果になった。

対象者の子供世代は同じ集落にはいないものの、昭和町、甲府市といった対象地から車で1時間程度の県内にいる場合が多く、少なくとも年に数回の接触はある対象者が多かった。また、電話などによるコミュニケーション頻度は毎週連絡する対象者が多かった。

次に生活の実態である。農作業従事者は18人、うち集落外で農作業従事者は12人、集落内での従事者は15人であった。一日作業時間は平均3.2時間/日であった。

多くの方が農業を営み、自家消費によって食生活は成立する対象者が多かった。生き甲斐に「農作業」や「子供や孫に農作物を届ける」といった回答もあり、農業に対する思い入れは大きい対象者が多い。

では全く購入しないかと言えばそうではなく、月・木曜日に集落にやってくる移動スーパーには9人、地区内商店には8人、そして町外スーパーには13人の利用者がいた。

生活活動詳細は、生活活動に関する聞き取りをカテゴリ分けし、その活動を行った対象者数と活動を行った人で割った平均時間によって分析を行った。なお、聞き取りが不十分だった2人をのぞき、20人で分析を行った。

起床時間は平均6時前、就寝時間は9時前であった。睡眠時間は平均9時間を超えていた。

午前中は農作業には20人中16人、午後は11人だった。農作業の頻度は午前の方が多いが、作業の平均時間はあまり変わらなかった。

朝食、昼食ともに30分程度であるのに対し、夕食は45分程度と他の食事に比べて長いという結果になった。夕食時、あるいは夕食後にテレビの視聴や、晩酌をする対象者もいるためと考えられる。

これらの調査を踏まえ、その地域での満足度、生活の質に影響を与える要因を、「農作業」、「交流」、「社会」、「健康」、「社会基盤」

と5つの大きな分野と定義し、さらに生活実態に即した細かい質問を作成することで、生活の質に関する調査票を作成した。

対象者には生活に質に関わる31の質問を「そう思う」「すこしそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5段階で評価してもらう。

一つ一つの質問は「農作業」、「交流」、「社会」、「健康」、「生活基盤」の5分野に分類され、分野ごとに集計した。

質問には「〇〇が楽しい」など「そう思う」がポジティブに評価される質問(以下ポジティブ質問)と、「〇〇が困る」など「そう思う」がネガティブに評価される質問(以下ネガティブ質問)とがあり、前者は「そう思う」に5点、「すこしそう思う」4点、「どちらとも言えない」3点、「あまりそう思わない」2点「そう思わない」1点を与えた。後者は配点を逆にし、「そう思う」を1点とし、「そう思わない」を5点とした。これにより、集計結果の得点が高いとよりポジティブに評価している、満足度(あるいは期待)が高いと解釈できる。

図1から図5にそれぞれの分野別の満足度得点のヒストグラムを示す。

農作業分野では左右対称な分布となった。中山間地域に居住する対象者にとって農作業が重要な存在だと考えがちである。しかし今回の結果は、農作業に関して満足している、興味を持つ対象者ばかりでなく、農作業にたいして満足していない、あるいはあまり興味がない対象者も少なくなく、農作業に関して多様な価値観が認められることがわかった。

交流分野では農作業分野とは対照的に、得点の高い対象者が多かった。来訪者との交流、自身の家族との交流に対する満足度、期待は高く、今回の結果は、今後の社会のあり方を考える上での根拠を示したと言える。

ただ、「期待が高い」と言うことは現状にはあまり満足していない可能性がある。次の社会分野の図を見ると、全体的に高め得点をつけた対象者は多いものの、高得点者は少ないという結果だった。図2で示した交流に関わる現状を評価し、結果として強く満足している対象者は少ない可能性が示唆された。

健康分野では満足度が高い対象者が多い。対象者は高齢者が多いが、自身の健康の現状に対して満足していることがわかる。しかしながら、自由記述欄に、「今後いつまで自身がここに住み続けられるか不安」「急に具合が悪くなったときに心配」などの記述が目立ち、今後や緊急時に不安に思っている対象者も少なくない。

最後に社会基盤に関する満足度である。経済状態や社会のインフラなどに関する満足度であるが、満足度の高い人もいる反面、そうでない人も同数程度いることがわかる。自

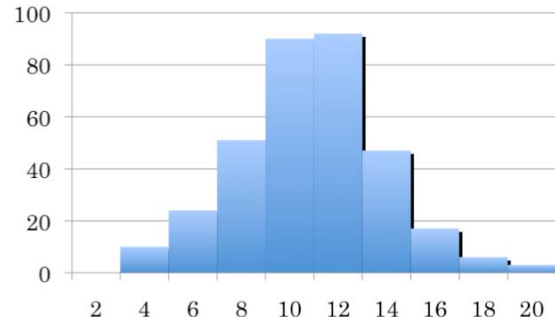


図1 農作業分野満足度

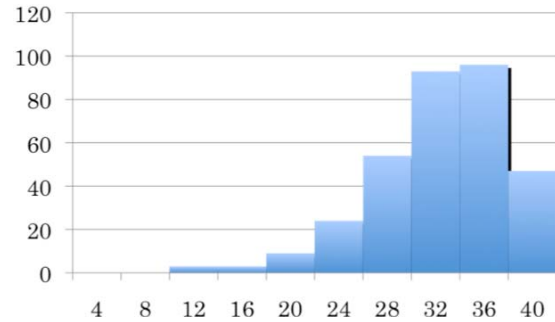


図2 交流分野満足度

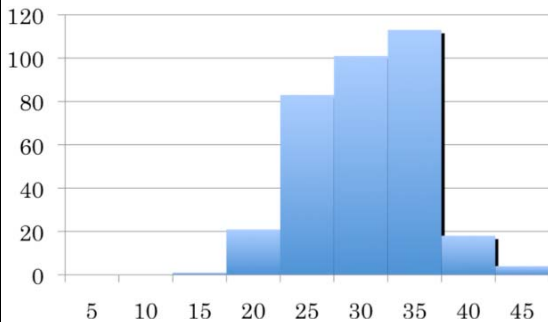


図3 社会分野満足度

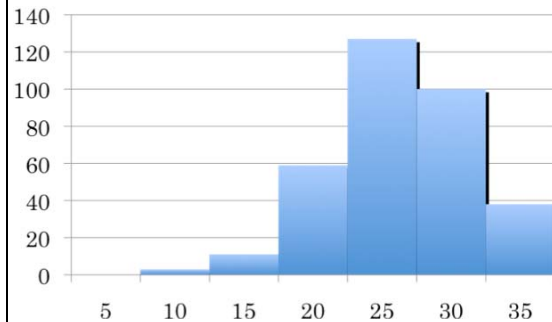


図4 健康分野満足度

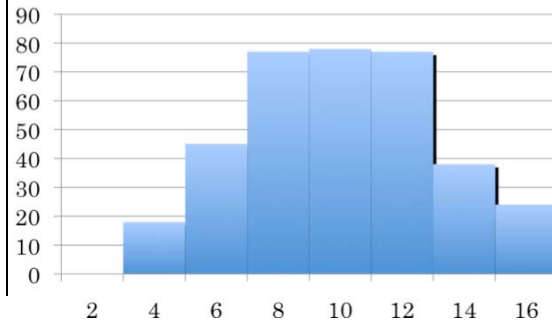


図5 社会基盤分野満足度

由記述欄では「近所にお店がない」という記述が少なくなく、自動車に依存できない高齢者にとっては満足度の低い状態になっている可能性がある。

生活活動能力とはその社会で生活をする上で必要な能力のことである。高齢になるにしたがってその能力が低下することは自由に生活する上での障壁だが、周辺環境によって必要な能力には違いが見られる可能性がある。今回は都老研の質問票により調査を行った。集計は65歳以上の高齢者に限定した。

結果が図6、図7である。図6は生活活動能力を3つの分野に分け、その各分野別のグラフ、図7は総得点のグラフである。いずれも高得点者ほど生活活動能力は高いと解釈する。総合得点(図7)では11点以上は「生活能力が高い」と判断するとされるが、今回の調査結果では10点以下の対象者も多く、今

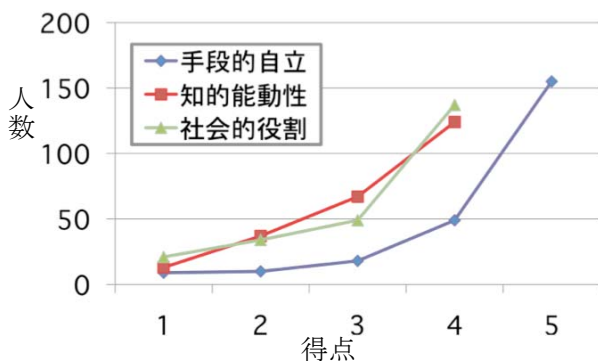


図6 生活活動能力

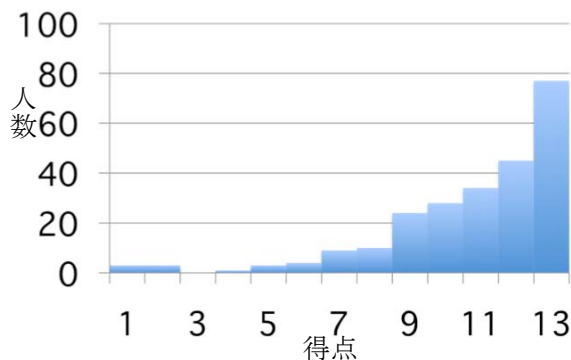


図7 生活活動能力合計

回の基準そのものを早川町には適用できない可能性がある。

最後に食物摂取調査の結果を図8に示す。緑黄色野菜を摂取する割合は高い一方、油脂類、肉類などの摂取は少ないという傾向が見られた。調査を行った11月頃の食生活が反映しているものと思われる。

今回の調査では回収率が配布数の約3割と低く、全体を代表しているとは言いにくい。今後は調査方法を再検討する必要がある。

最後に本研究の質問票に記入していただ

いた皆様に心より感謝します。

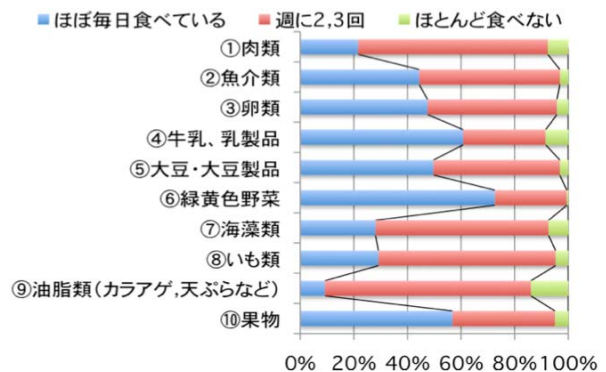


図8 食物摂取調査結果

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

萩原 潤, 柴田 彩子, 本郷 哲郎, 中山間地域における生活機能得点の特徴, 日本老年社会科学会第51回大会, 2009/06/19, 横浜

萩原 潤, 安部 未希子, 京谷 恵里, 柴田 彩子, 本郷 哲郎, 中山間地域に居住する高齢者の生活実態, 第73回日本民族衛生学会総会, 2008/10/26, 横浜

萩原 潤, 安部 未希子, 京谷 恵里, 柴田 彩子, 本郷 哲郎, 中山間地域居住者の家族とその関係, 第50回日本老年社会科学会大会, 2008/06/27

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

○取得状況 (計 件)

〔その他〕

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

萩原 潤 (HAGIHARA JUN)

宮城大学・看護学部・准教授

研究者番号: 90347203

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者